

## ラッセル=アインシュタイン宣言 (1955)

人類が直面している悲劇的な情勢の中、科学者による会議を召集し、大量破壊兵器開発によって生ずる危機を予測し、この草案の精神において決議を討議すべきであると私たちは感じている。

私たちが今この機会に発言しているのは、特定の国民や大陸や信条の一員としてではなく、存続が危ぶまれている人類、即ち、ヒトという種の一員としてである。世界は紛争に満ち満ちている。そこでは諸々の小規模紛争は、共産主義と反共産主義との巨大な戦いのもとに隠蔽されていいる。

政治的な関心の高い人々のほとんどは、こうした問題に感情を強くゆさぶられている。しかしもしできるならば、そのような感情から離れて、すばらしい歴史を持ち、私たちの誰一人としてその消滅を望むはずがない生物学上の種の成員として反省してもらいたい。

私たちは、一方の陣営に対し、他の陣営に対するよりも強く訴えるような言葉は、一言も使わないように心がけよう。すべての人がひとしく危機にさらされており、もしこの危機が理解されれば、共にそれを回避する望みがあるのだ。

私たちに新たな思考法が必要である。私たちは自らに問いかけることを学ばなくてはならない。それは、私たちが好むいづれかの陣営を軍事的勝利に導くためにとられる手段ではない。なぜなら、そうした手段はもはや存在しないからである。私たちが自らに問いかけるべきことは、双方に悲惨な結末をもたらすにちがいない軍事的な争いをどうすれば防止できるかである。

一般の人々、そして権威ある地位の多くの人々でさえも、核戦争によって発生する事態を未だ認識していない。一般の人々はいまでも都市が抹殺されるくらいにしか考えていない。新型爆弾が旧型爆弾よりも強力だということ、原子爆弾なら1発で広島を抹殺できたのに対して、水爆なら1発でロンドンやニューヨークやモスクワのような巨大都市を抹殺できるだろうことは明らかである。

水爆戦争になれば大都市が跡形もなく破壊されてしまうだろうことは疑問の余地がない。しかしこれは、私たちが直面を余儀なくされる小さな悲惨事のひとつである。たとえロンドン、ニューヨーク、モスクワのすべての市民が絶滅したとしても、2、3世紀のあいだには世界は打撃から回復するかもしれない。しかしながら今や私たちは、特にビキニの実験以来、核爆弾はこれまで想像されていたよりもはるかに広範囲にわたって徐々に破壊力を広げるであろうことを知っている。

信頼できる権威筋によると、現在では広島を破壊した爆弾の2500倍も強力な爆弾を製造できるとのことである。もしそのような爆弾が地上近くまたは水中で爆発すれば、放射能をもった粒子が上空へ吹き上げられる。そしてそれらの粒子は死の灰または雨の形で徐々に落下してきて、地球の表面に降下する。日本の漁夫たちとその漁獲物を汚染したのは、この死の灰であった。そのような死をもたらす放射能に汚染された粒子がどれほど広く拡散するのかは誰にも分らない。しかし最も権威ある人々は一致して水爆による戦争は実際に人類に終末をもたらす可能性が十分にあることを指摘している。もし多数の水爆が使用されるならば、全面的な死滅 - 即死するものはほんのわずかだが、多数のものは長い間病気の苦しみをなめ、肉体は崩壊してゆく、という恐れがある。

著名な科学者や軍事戦略の権威から多くの警告が発せられている。にもかかわらず、最悪の結果が必ず起こるとは、だれも言おうとしていない。彼らが言っているのは、このような結果が起こる可能性があるということ、そしてだれもそういう結果が実際に起こらないとは断言できないということである。この問題についての専門家の見解が彼らの政治上の立場や偏見に少しでも左右されたということは今まで見たことがない。私たちの調査で明らかになったかぎりでは、それらの見解はただそれぞれの専門家の知識の範囲にもとづい

ているだけである。一番よく知っている人が一番暗い見通しをもっていることがわかった。

さて、ここに私たちが皆さんに提出する問題、きびしく、恐ろしく、そして避けることのできない問題がある - 私たちは人類に絶滅をもたらすか、それとも人類が戦争を放棄するか？ 人々はこの二者択一という問題を面と向かってとり上げようとしないうであらう。というのは、戦争を廃絶することはあまりにもむずかしいからである。

戦争の廃絶は国家主権に不快な制限を要求するであらう。しかし、おそらく他のなにものにもまして事態の理解をさまたげているのは、「人類」という言葉が漠然としており、抽象的だと感じられる点にあるだろう。危険は単にぼんやり感知される人類に対してだけではなく、自分自身や子どもや孫たちに対して存在するのだが、人々はそれを想像力を働かせることによって認識することがほとんどできない。人々は個人としての自分たちめいめいと自分の愛する者たちが、苦しみながら死滅しようとする切迫した危険状態にあるということがほとんど理解されていない。そうして人々は、近代兵器さえ禁止されるなら、戦争は継続してもかまわないと思っている。

この思いは幻想である。たとえ水爆を使用しないといういかなる協定が平時に結ばれていたとしても、戦時にはそのような協定はもはや拘束とは考えられず、戦争が起こるやいなや双方とも水爆の製造にとりかかるであらう。なぜなら、もし一方が水爆を製造して他方が製造しないとすれば、それを製造した側は必ず勝利するにちがいないからである。軍備の全面的削減の一環としての核兵器放棄に関する協定は、最終的な解決には結びつくわけではないが、一定の重要な役割を果たすだろう。第一に、およそ東西間の協定は、緊張緩和を目指すかぎり、どんなものであっても有益である。第二に、熱核兵器の廃棄は、もし相手がこれを誠実に実行していることが双方に信じられるとすれば、現在双方を神経質的な不安状態に落とし入れている真珠湾式の奇襲攻撃の恐怖を減らすことになるであらう。それゆえ私たちは、ほんの第一歩ではあるが、そのような協定を歓迎すべきなのである。

大部分の人間は感情においては中立ではない。しかし人類として、私たちは次のことを忘れてはならない。すなわち、もし東西間の問題が何らかの方法で解決され、誰もが 共産主義者であらうと反共産主義者であらうと、アジア人であらうとヨーロッパ人であらうとアメリカ人であらうと、白人であらうと黒人であらうと 出来る限りの満足を得られなくてはならないとすれば、それらの問題は戦争によって解決してはならない。私たちは、東側においても西側においても、このことが理解されることを望んでいる。

私たちの前には、もし私たちがそれを選ぶならば、幸福と知識の絶えまない進歩がある。私たちの争いを忘れることができないからといって、そのかわりに、私たちは死を選ぶのであろうか？ 私たちは、人類として、人類に向かって訴える **Remember your humanity, and forget the rest.** あなたがたの人間性を思い起して、そしてその他のことを忘れなさい、と。もしそれができるならば、道は新しい樂園へむかって開けている。もしできないならば、あなたがたのまえには全面的な死の危険が横たわっている。

決 議：

私たちはこの会議を招請し、それを通じて世界の科学者たちおよび一般大衆に、以下の決議に署名するよう勧める。

「将来の世界戦争においては必ず核兵器が使用されるであらうし、そしてそのような兵器が人類の存続をおびやかしているという事実からみて、私たちは世界の諸政府に、彼らの目的が世界戦争によっては促進されないことを自覚し、このことを公然と認めるよう勧告する。したがってまた、私たちは彼らに、彼らのあいだのあらゆる紛争問題の解決のための平和的な手段をみいだすよう勧告する。」

1955年7月9日 ロンドンにて

Max Born マックス・ボルン教授 (ノーベル物理学賞)  
Percy W. Bridgman P.W.ブリッジマン教授 (ノーベル物理学賞)  
Albert Einstein アルバート・アインシュタイン教授 (ノーベル物理学賞)  
Leopold Infeld L.インフェルト教授  
Frederic Joliot-Curie F.ジョリオ・キュリー教授 (ノーベル化学賞)  
Herman J. Muller H.J.ムラー教授 (ノーベル生理学・医学賞)  
Linus Pauling ライナス・ポーリング教授 (ノーベル化学賞)  
Cecil F. Powell C.F.パウエル教授 (ノーベル物理学賞)  
Joseph Rotblat J.ロートブラット教授  
Bertrand Russell バートランド・ラッセル卿 (ノーベル文学賞)  
Hideki Yukawa 湯川秀樹教授 (ノーベル物理学賞)

.....

この宣言後に、

1957年7月 第1回パグウォッシュ会議がカナダのパグウォッシュ村で開催されることとなった。世界各国の22人の科学者がカナダの漁村パグウォッシュ(Pugwash)に集まり、核兵器の危険性、放射線の危害、科学者の社会的責任について真剣な討議を行った。当時は東西冷戦のさなかで、米ソの水爆開発競争が続き、核兵器実験が地上でも大気圏でも相次いでおり、全世界(特に北半球)で大気や雨の中に放射能が観測されていた。

この会議には、アメリカ、カナダ、西ヨーロッパ、オーストラリア、ソ連、東ヨーロッパ、中国、日本の物理学者を中心とした自然科学者たちが参加した。

日本パグウォッシュ会議

<http://www.pugwashjapan.jp/index.html>